

# 序

「この薬は、前の薬とどこが違うの？」と、患者から聞かれて返答に困ったことはないでしょうか。似たような薬がたくさんある中でなぜこの薬が選ばれたのか、なぜ別の似た薬ではダメだったのか、その理由をきちんと説明するのはとても難しいことです。ひとつひとつの薬の作用は知っていても、それが今ある薬全体の中でどういった位置づけにあるのかを把握していなければ、どのように使い分ければ良いかはわからないからです。

我々は車やパソコンを買うとき、似たような製品の性能を比べて、燃費はどちらが良い、処理速度はどちらが速い、といったことを調べた上で選びます。このように似たものを比較して違いを知ることは、そのものを深く理解するために必要なプロセスです。薬もそれぞれの作用を知るだけでなく、似たもの同士を比較して効き目の速さ、強さ、個人差の出やすさ、検査値への影響、治療効果の違い、副作用の少なさなど、どのような違いがあるかを知ることが必要です。

本書は、ブログ「お薬Q&A～Fizz Drug Information」で公開している「似た薬の違い」から特に現場で困ることの多い100個のテーマを厳選し、大幅に加筆するとともに、より深い考察のためのコラムやこぼれ話を新規に書き下ろしたものです。1つのテーマを3～4ページでまとめているため、忙しい日常業務の合間に、新卒の薬剤師や出産などでしばらく離職していた薬剤師でも無理なく読むことができます。また、根拠として約730点（うち添付文書・インタビューフォーム約250点を含む）の参考文献も明記しているため、患者への服薬指導に限らず、使い分けに苦慮している医師に処方提案する際にも活用して頂ければ幸いです。

優秀な車の販売員は、車の性能をただ羅列するのではなく、他の車ではなくこの車を買ったときに人生がどう変わるかというストーリーを語ります。薬剤師も薬の情報を羅列するのではなく、薬を飲んだその人の人生がどう良くなるのかを考えて服薬指導する必要があります。本書が「薬の使い分け」を理解するための足掛かりとなり、魅力的な指導ができる薬剤師が増える一助になることを願っています。

最後に、本書の執筆にあたり、完成まで支えてくださった編集担当の秋本佳子さま、デザイン担当の鳥山拓朗さまをはじめ、羊土社編集部の皆さんに心からの感謝を申し上げます。

2017年9月

児島 悠史

